

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

令和元年7月2日

農業技術課 広域普及指導センター

1 生育状況（実証ほデータ）

前年に比べて、草丈、葉色は並み、茎数はやや多く、葉齢は0.2葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、草丈はやや短く、茎数はやや多く、葉色は並みとなっている。

今後、平年並みの気温で推移した場合、幼穂形成期、出穂期はそれぞれ前年より1日程度早い7月12日頃、8月1日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月2日 栽培実証ほ）

年次または 試験内容	ほ場数 (筆)	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
				(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R元	12	5月13日	48.9	28.8	622	11.1	4.4	41.0	(7/12)	(8/1)
H30	19	5月15日	48.5	27.1	594	10.9	4.4	39.7	7/13	8/2
H29	16	5月14日	44.1	29.7	613	10.5	4.4	41.8	7/12	8/3
前年比・差		-2	101	106	105	0.2	0.0	1.3	(-1)	(-1)
早期田植栽培	6	5月4日	53.0	30.2	646	11.4	4.3	40.0	(7/9)	(7/29)
高品質安定栽培	6	5月15日	46.7	28.7	635	10.8	4.3	39.6	(7/13)	(8/2)

注) R元・平均: 生育観測栽培と高品質安定栽培・対照区(合計12ほ場)の平均
H30およびH29: 特別栽培米を除く、それぞれ19および16か所の平均

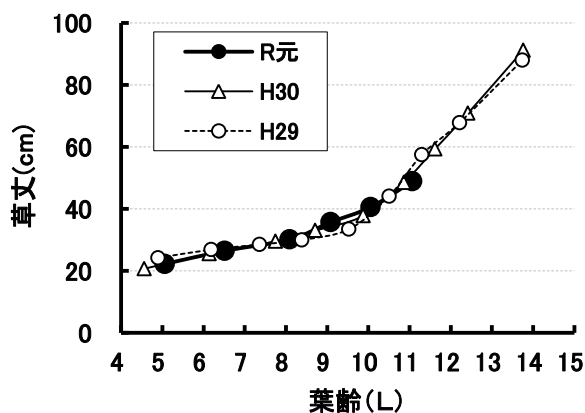


図1 草丈の推移（富富富実証ほ）

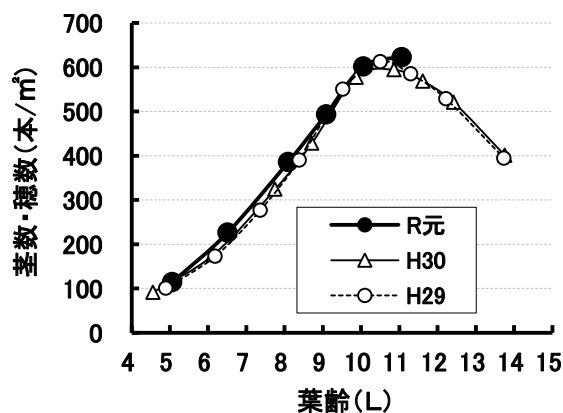


図2 茎数の推移（富富富実証ほ）

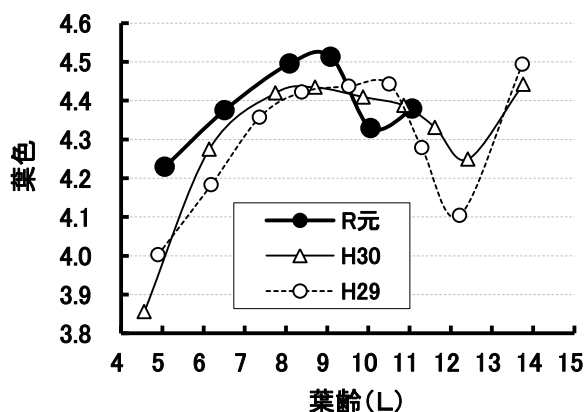


図3 葉色の推移（富富富実証ほ）

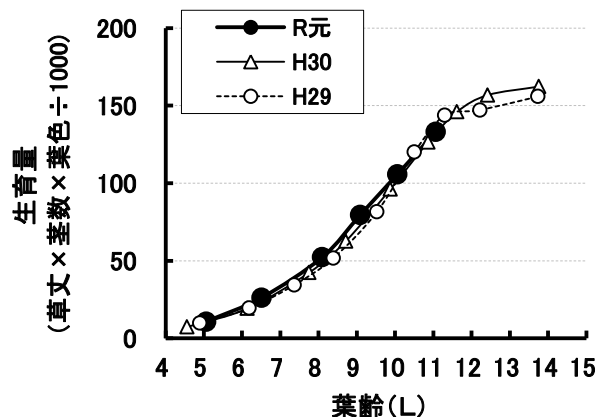


図4 生育量の推移（富富富実証ほ）

2 当面の技術対策

- ・ 本年は、茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、①幼穂形成期までは落水期間が長めの間断かん水、②幼穂形成期から出穂期までは間断かん水を行う。
- ・ 分施栽培における穂肥は、1回目を幼穂形成期の7日後頃に窒素成分で0.75～1.0kg/10a、2回目を1回目の7日後に窒素成分で1.5kg/10aを基本とする。

(1) 水管理

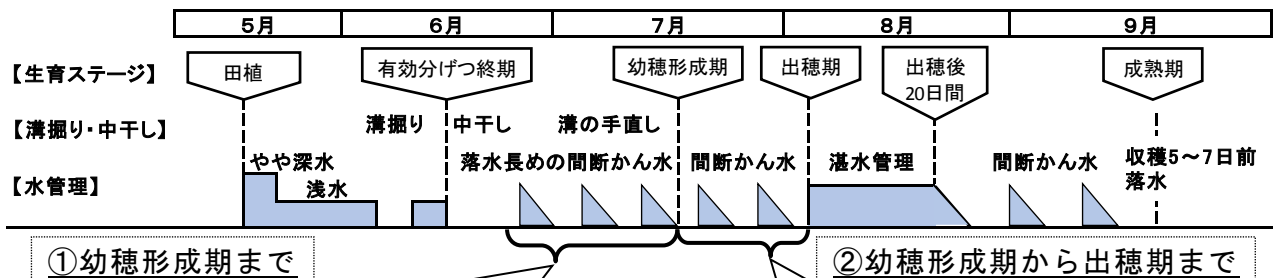
① 幼穂形成期まで

- ・ 本年は、茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期のSPAD値35（群落葉色4.0程度）に誘導する。
- ・ 地耐力が確保されていないほ場は、間断かん水により、幼穂形成期頃までに足跡の深さ3cm程度の土壌硬度に誘導する。

② 幼穂形成期から出穂期まで

- ・ 本年は、葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期から出穂期までは間断かん水を行い、過剰籾数を防ぐ。
- ・ ただし、幼穂形成期の茎数が580本/m²以下で、かつSPAD値35（群落葉色4.0）以下の場合には、飽水管理を行い、稲体や根の健全化を図る。

<水管理のイメージ>



R元年産「富富富」では、茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を実施。

※マニュアルには、「飽水管理」と書かれているが、本年は、葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期から出穂期まで間断かん水を行う。

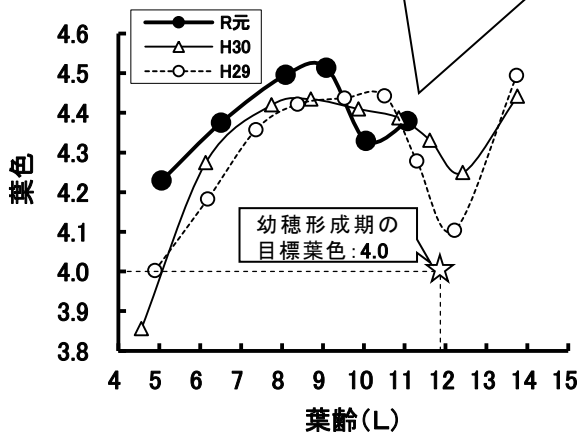


図5 葉色の推移（富富富実証ほ）

(2) 分施栽培における穂肥施用

- ・ 穂肥は1回目を幼穂形成期の7日後頃(幼穂長15mm程度)に窒素成分で0.75~1.0kg/10a施用し、2回目を1回目の7日後に1.5kg/10a施用する。
- ・ なお、幼穂形成期の茎数が580本/m²より多く、またはSAPD値が35(群落葉色4.0)より濃い場合は、1回目の穂肥を施用せず、幼穂形成期の14日後頃に窒素成分で1.5kg/10aを確実に施用する。

表2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	m ² 茎数 (本/m ²)	SPAD	群落葉色	生育量	
				SAPD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量: 草丈 × 茎数 × 群落葉色 ÷ 1000

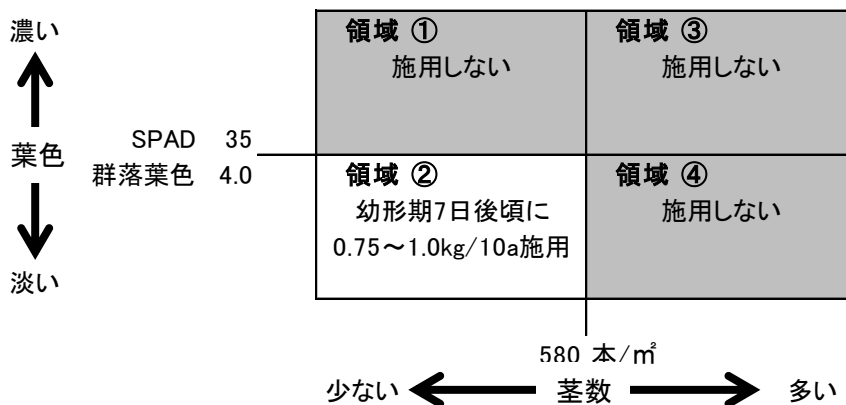


図6 幼穂形成期の生育に基づく1回目穂肥施用の目安
(R元年度暫定版)

(3) 全量基肥栽培における穂肥施用

- ・ 原則、追加穂肥は施用しない。
- ・ ただし、幼穂形成期の14日後のSPAD値32(群落葉色4.2)未満の場合は、出穂3日前(走り穂が確認される頃)までに窒素成分で1.0kg/10a程度の追加穂肥を行い、穂揃期のSPAD値35(群落葉色4.4)に誘導する。

(4) 病虫害および雑草防除

病虫害および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるように留意する。

○ カメムシ類

- ・ 畔畔等のイネ科雑草の穂は、カメムシ類の好適なエサとなるので、穂が出ないように草刈りを徹底し、カメムシ類の発生量を少なくする。

※ 草刈り運動期間：7月1日~10日 一斉草刈り日：7月6日~7日

- ・ 近隣に雑草地や麦あと不作付地等がある水田では、カメムシ類の発生が多くなる場合があるので防除を徹底する。
- ・ 本田内のノビエやホタルイは、アカスジカスミカメの侵入を招き、斑点米被害を助長するので、除草に努める。

○紋枯病 ※平年の初発確認日 6 月 23 日 (H30 : 6 月 25 日)

- ・ 前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂 3~4 週間前 (粒剤)、または、品種ごとの散布適期 (粉剤、液剤等) に防除を確実にを行う。
- ・ その他のほ場では、要防除水準を参考にし、必要に応じて適期に防除を行う。
※ 「富富富」の要防除水準は「コシヒカリ」に準じる。

表 3 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)	要防除水準 (発病株率)
コシヒカリ	出穂 10 日前頃	15%